

南陽楼の店守

渡邊香梨 Karin Watanabe



アルファポリス文庫

第一章 真夜中の小道具店

倣国皇都・赫連。

三大歓楽街の一つ、南花街にその店はあった。

「珠葵！ 珠葵、今日もお願い！」

慌てたように駆け込んでくる、変身前の若い妓女に、柳珠葵はこれみよがしにため息をついてみせた。

「名うての美女が台無しですよ、茗霞姐さん」

茗霞、と呼ばれた美少女は、それどころじゃないとでも言わんばかりに、珠葵の前で両手を合わせている。

「今日は柴様がいらしてくださる日なの！ だけど、そう何度と同じ簪なんて見せられないでしょう？ だから、お願い！」

他の先輩姐さんたちに見られでもしたら、礼儀作法に関して懇々と説教されるだろうに———と思いつながら、一緒に叱られるのも真つ平ご免なので、珠葵としては、請われるがまま、簪が入った箱をいくつも机の下から出すだけである。

「あ、そういえば今朝ちょうど、笹夏ちゃんシバカが『葉華姐さんからの差し入れ』だって新しい簪かんざしを置いていってくれました。見ますか？」

「え、葉華姐さんが？ 見たいわ。見せて！」

今にも取って食べそうな勢いでこちらを覗き込んでくる茗霞に、珠葵は今朝手にしたばかりの真新しい箱を追加で取り出した。

「うわあ、萩はぎ！ 萩の花の細工さいくね？ 素敵すてき！」

「皆さん、少しだけ季節の先取りをされた衣装や飾りをお着けになるのが常ですし、今からの時節にちょうどいいだろうということみたいです」

「ねえ、珠葵！ 私、これがいいわ！ お代はいつもの通りでいいの？」

「はい、大丈夫ですよ。葉華姐さんも、まだまだ御蟲肩ひいさ様から簪を贈られることの少ない若手の妓女たちのために——と、いつも置いていくくださっていますし。いつもの通り、明日の朝に返していただければ、それで」

「ありがとうございます！ 柴様に目をかけていただけるよう、これをお守りにして頑張るわ！」

簪入りの箱を握りしめて、顔を赤らめながらパタパタと走り去る茗霞を、珠葵はひらひらと片手を振りながら見送った。



妓楼ぎろう・南陽楼ナンヨウロウ。

南花街の中でも飛び抜けて格が高い妓楼で、生半可な財や身分の客では、足を踏み入れることすら叶わないとも言われている。

珠葵はその妓女——ではない。

奉公人の一人として、妓楼の一階の隅すみで、妓女たちの簪や首飾り、腕輪など装飾品の数々を取り扱う店を開いているのだ。

営業時間は妓楼と同じ、夜の間。

売ることはもちろん、お金のない若手の妓女のための貸し出しや買い取り、壊れた装飾品の手直しなど、幅広いことを妓楼の中で行っている。

これが存外需要があるもので、華やかな世界が売りであり、同じ装飾品を何度も着けていられない妓女たちの間で、すっかり商売として成り立っているのだ。

最近では近隣の妓楼からも、妓女やその補佐をする奉公人たちが顧客として店を訪れるほどだ。

今もちょうど、駆け出しから一歩前進したくらい……といったところにある妓女・茗霞が、新しい簪を買う代わりに、店にある在庫の中から借り受けていったところ

だった。

「葉華姐さんからの提供とわかれは、引つ張りだになりそうだし……取り扱いても気をつけないとね」

南陽楼の葉華といえは、この妓楼一、あるいは花街全体を見ても頂点に君臨するのではと、誰もが口を揃えるほどの美妓であり、身請けを望もうものなら、国が傾くのではないかとさえ噂されている。

やんごとなき身分の方々との会話にも困らないほどの知識があり、後輩妓女たちにも優しく、奉公人である珠葵にさえ、体調や待遇など何かと気を配ってくれる。

葉華のことを所詮花街の妓女と下に見る小役人などがいれば、あつという間に出入り禁止になってしまうほどの、伝説の妓女だ。

おそらくはあの簪は、葉華を指名した客からの贈り物だろうけど、妓楼において一度身に着けた物を二度使わないというのは、高位であれば暗黙の了解とされているし、下位の妓女たちの懷事情が決して良くないことも、同じく暗黙の了解だ。

南陽楼に来るほどの客となれば、皆そのことは承知しており、いずれ別の妓女が自分の贈った装飾品を身に着けたとしても、後輩思いと称えこそすれ、詰つたりはしないのだ。

「さて、今日は……ああ、そうだ。橘木姐さんから預かっている腕輪の修理がまだ途

中――」

そう思い立った珠葵が、道具を出そうと立ち上がったそこへ、店の中に誰かが入ってきた。

「いらつしやいませ——つて、鄭様じゃないですか」

妓楼に来る男性客の目的が妓女ばかりというわけではない。

「こんばんは、珠葵。店は上手く回っているかい？」

「はい、さつきも早速簪を借りていく妓女がいて、順調に回っていると思います」
珠葵の言葉に「それは重畳」と微笑んだのは、鄭圭琪。

この店の出資者、皇宮内・御史台勤めであり、御史台を束ねている朱雪娜直属の部下だ。

いつものことではあるけれど、前置き不要とばかりに圭琪は、胸元から袱紗に包まれた物を取り出して、店の机の上にそつと置いた。

「——これを、また頼めるかな」

慣れたものとばかりに珠葵が袱紗をさつと開けると、中からは子どもが食べる飴のような小さな丸い玉と、刃の部分がこぼれて錆びた短剣が出てきた。

「珍しいですね。今回、手こずったんですか？」

再び袱紗で中身を包みながら、不思議そうに尋ねた珠葵に、「少しね」と圭琪も頷

いた。

「しかも一部を逃がしてしまった」

「え……」

「ああ、うん。雪娜様のお張りになる結果に綻びはない。ただ、夜の闇に紛れただけ。大局的な見地からすれば、小競り合いの一端で片付けられることではあるんだ」

「そ、そうなんですか……?」

「ああ。ちよつと数が多かったんだ。だから対処に追われた呪具の一部に、こうやって不具合が出てしまった。すまない」

「いえ、そこは仕事ですから。じゃあ……ちよつとお時間頂けますか? それとも、いったん御史台にお戻りに?」

「今日は、待たせてもらうよ。もしかしたら、またすぐに出番があるかもしれないからね」

軽口を挟めない雰囲気ですう告げる圭琪に、珠葵も「わかりました」と告げるより他はない。

「おせんちゃん——? おせんちゃん、起きて——?」

そして圭琪の方ではなく、天井を見上げながら声をかけると、ポンツと表現するのが正確であろう音が聞こえて、突然そこに白い毛の塊が出現した。

両の手のひらを上に向けた珠葵の目の前に、その塊が落ちて転がる。

【どうしたの、珠葵ちゃん——? 今日は早くない?】

珠葵の手から、今度は床へと転がり落ちたその塊からは、最初に赤い角、次に小さな羽が飛び出てきて、やがて全身を白い毛で覆われた、小さな龍の姿へと変貌を遂げた。

可愛らしいその姿は、子猫にしか見えない。

声は、ぱくぱくと開いた口からではなく、頭の中に直接響いてきている感じだ。

「うん。ちよつと早いんだけど、今日は鄭様に来ていてね? アレやるから、店番お願いたいなと思って」

【アレ? やったあ。わかった! ちよつと待ってて】
嬉しそうに叫んだ小龍は、今度はその場で拳一つ分ほど宙に浮いたまま、何度かくるくると前に回り始めた。

そうしているうちにその姿は、珠葵と同じ年頃の少女の姿へと変貌を遂げる。

珠葵もそうだが、鄭圭琪も慣れているのか驚きもしないし声も上げない。

「じゃあ、アタシは今から、白桜泉^{シロオウゼン}ってコトでヨロシクね。アタシとお兄ちゃんのごはん待ってるから、早くね!」

さつきまでとは違い、その少女からは頭の中ではなく耳に、普通に声が聞こえて

いる。

「ん、わかった。頑張るね」

「珠葵……そういうのは、奥に入ってからやらないと……」

圭琪は二人のやりとりを見て驚きはしないが、小言は言わねばと思つたらしい。眉根を寄せている彼に、珠葵は、しまったとペロリと舌を出した。

「ご、ごめんなさい。じゃあ、奥へどうぞ？」

「……………」

返事の代わりに圭琪は嘆息して、そのまま珠葵の後に続いて店の奥へと足を踏み入れたのだった。

珠葵は、圭琪から預かった短剣を、奥の部屋の机の上で再び袱紗から取り出して広げた。

「じゃあ、お急ぎとのことなので……」

「ああ、すまない。特急料金として、少し色を付けるよ」

「言いましたね、鄭様？」

あえて軽い言い方で場を解した珠葵は、そこで静かに目を閉じると、机上の短剣に無言で手をかざした。

「――」

その途端、珠葵の手が仄かな光を放ち始め、やがてその光がゆつくりと、短剣の刃の部分を覆い尽くしていく。

圭琪は特段の驚きは見せずに、その光がやがて刃から離れて、小さな赤い「珠」となつて机に転がる一部始終を黙って見つめていた。

「……お疲れ様、珠葵」

「ホントですよ。正直今回、ちょっといつもより力が必要で、骨が折れました」

そう言つて、ふう……と大きな息を吐いた珠葵は、やがてゆつくりと、閉じていた目を開いた。

目の前の、あれだけ錆びていたはずの短剣は――元の鋼の輝きを取り戻していた。うん。まあ、成功したと言つて大丈夫だろう。

「いつもながら、仕組みの不思議な見事な「修復術」だね。前に、修復の最中にそう言つたら怒られてしまったから、終わつてからの褒め言葉で申し訳ないが」

パンパン……なんて大きな拍手の音は鳴らない。圭琪の手は、ほぼ叩くフリをしているだけからだ。この笑顔と拍手を額面通りに受け取つてはいけない。

「あ……それは、いきなり途中で話しかけられて、ビックリして集中力が切れちゃったんです。っていうか、もういつまでも昔の話を持ち出さないでくださいよ！」

こういう時は、仕事の顔で話をしておくに限る。珠葵なりの、トラブル回避術だった。

「じゃあ、いつも通りにこちらの珠は頂きますね？」

珠葵は小さな赤い「珠」の方は手元で掬い上げて、錆びの取れた剣に関しては、袱紗で丁寧に包み直して、そのままスツと圭琪の方へと押し出した。

「ああ、ありがとう。助かったよ。それじゃあ、これを——」

修復の済んだ短剣を受け取った圭琪は、代わりに懷から「音のする綴じられた袋」を取り出して、珠葵の前に置いた。

「今日の依頼料だ。特急料金は、今度この南陽楼に顧客を紹介することで勘弁してくれるかな。君の職場が潰れないよう、気を配っておくことも大事だろうからね」

「……冗談でもそういうことを言うと縁起が悪いって、葉華姐さんに怒られても知りませんよ」

「それは怖いな。聞かなかったことにしておいてくれ」

そう言って肩を竦めた圭琪が、本当に怖がっていたかどうかは謎だ。

立ち去る圭琪に一礼して、店の外まで出たであろうタイミングを見計らってから、珠葵も元のお店の方へと戻った。

「おせんちゃん、終わったよー?」

店の中に客がいなかったこともあってか、珠葵に声をかけられた美少女は、ぱあっと表情を明るくして、受付机の方から勢いよく振り向いた。

「終わった? ねえ、採れた? 採れた?」

「もちろん! しかも今日のは結構イイヤツだよ?」

「やたっ!」

見た目は美少女でも、実はこの「おせんちゃん」の正体は、人外の神獣・白龍の幼体だ。

捨て子だった珠葵が国に保護されたのは、彼女が五歳の頃。

その時彼女は、二匹の怪我をした生き物を抱いていた。

やがて、それらが双子の龍で、国を守護すると言われる神獣・龍泉の子だとわかり、当時皇宮中は大騒ぎになったのだが——

双子の龍は珠葵に懐き、珠葵は妹に「桜泉」、兄に「龍河」と名付けたのだった。

「今日は二個手に入ったから、おせんちゃんと、リュウ君とそれぞれにあげられるよ!」

そう言ってニコニコと笑った珠葵は、手のひらに二つの「珠」を乗せて、おせんちゃんこと、桜泉へと差し出して見せた。

「えへへ、ありがと」

珠葵のニコニコにつられるように笑った桜泉は、珠葵の手のひらから二つの〴珠をひょいっと摘まみあげると、そのうちの一つ、色が薄めの〴珠を、餡を口に放り込むがごとく、ひょいっと自らの口に放り入れた。

その途端に、桜泉の周囲にそよ風のような風が吹いて、淡い光を放って周りを取り囲んだ。

「——うん、今日のは美味しいね、珠葵ちゃん。お兄ちゃん、喜ぶかも。回復の糧になるって」

「やったー！ 嬉しいなあ……！ リユウくんにも早く、おせんちゃんみたいに自由に変化できるようになってほしいもんね！」

珠葵の言葉がお世辞か本音かは、たとえ小龍といえどわかるものらしい。心の底から龍河の回復の糧になって欲しいと思っているのだ、と。

「珠葵の笑顔は本音だもんね……」

そう言った桜泉は苦笑いしつつも、くるりと踵を返すと、お店の隅に置かれている葛籠の蓋を、なんでもないことのように外して横に置いた。

「——お兄ちゃん」

葛籠の中には、小さな座布団が敷かれていて、中には白い毛で覆われた小さな龍が

眠っていた。

「お兄ちゃん、起きて。珠葵ちゃんがいつもの〴珠を持って来てくれたよ」

桜泉の呼びかけに、お兄ちゃんと呼ばれた小さな白い龍はパチリと目を開いた。

赤い角が頭頂部に二本。

赤い色をした目。

それより何より、龍と呼ばれているのに全身が鱗ではなく白い毛で覆われている。

角がなければ猫と見間違えう姿。だがそれこそが、国を守護する龍の一族の何よりの特徴らしい。

「お兄ちゃん」

桜泉が、優しい声と表情で話しかけている。

「お兄ちゃん、珠葵ちゃんが〴珠を手に入れてきてくれたよ。今日のは結構、力が強いよ」

そう言って、指で摘まんだ暗赤色の〴珠を、葛籠の中にいた小龍の口の中に、そっと含ませた。

すると今度は、先刻桜泉が口にした時よりも、より眩い光が一瞬だけ辺りを満たした。

「……ど、どうかな？」

桜泉の声が、ちよつとだけ震えている。

つられて、珠葵も何だかドキドキと、龍河の返事を待つ。

【変化は……まだ、難しいな】

小龍の口がかばつと開いたけれど、そこからは音は聞こえずに、珠葵の頭の中に、大人とも子どもとも言えない、やや高めの心話が聞こえてきた。

「そっか……」

その答えに、何となく珠葵も桜泉もシュンとなる。

それを見た龍河は、葛籠の中でちよつと慌てていた。

【いやっ、だけど、ほら！ オレの白い体毛が、より白さを増した！ 白龍の毛は、成長すれば貂やチンチラなんかには負けない体毛になるぞ。いつか絶対、珠葵には冬でも寒くない襟巻を作らせてやるから、待つてろ】

普通は、龍の鱗どころか体毛なんて、祭壇で崇め奉られても不思議ではないほどの物だ。それを襟巻にするなどと口にしてはいる。

龍だの神獣だのと聞けば、畏れ多いと平伏してしまう人もいる中、実際には、桜泉も龍河も、結構なお人好しならぬお龍好し(?)だ。

「ふふ……わかった、待つてる」

珠葵がそう言つて微笑うと、桜泉も龍河も、ちよつとホツとしたように息を吐き出

していた。



国に保護された珠葵は、特殊な力を持っているということで管理下に置かれた。

ただし、珠葵にできたのは、誰かの傷を塞いだり、体力を回復させたりすることだけ。

それもちゃんとしたり方を知らなかつたがゆえの自己流、無意識の産物だった。

それが今では、妖退治で負つた怪我や、武器に付いた穢れを祓えるくらいにまで、力の制御ができるようになった。

皇宮内において監察の役割を果たす御史台の中にあって、特に人ならざるモノの調査処罰を行う専門部署・御史台更夜部が設立されて、年月はそれなりに経過している。

更夜部が特殊な力が必要とする部署であるがゆえに、その管理者は男女の別を問わない。当代の長は朱雪娜。その直属部下が鄭圭琪である。

二人が、珠葵が自分の意思で力が揮えるように、アレコレ手ほどきをしてくれた結果だった。

その雪娜は、今や更夜部だけではなく、御史台全体を束ねる史上最年少の御史大夫

だ。普通に考えればありえないことだが、それだけ妖退治と監察、双方の能力が抜
きん出ていたのだ。

雪娜から「被った穢れは、従えた人ならざるモノの餌にも薬にもなる」と教え
られた珠葵は、大怪我を負っていた桜泉と龍河を回復させるための薬として、穢れを
圧縮した「珠」を作るようになった。

雪娜曰く、「国中を探しても、片手の数に収まるほどの人間にしかできない能力」
とのことで、おそらくはそれがあったがゆえに、皇都でこうやって生き延びてい
らうと、珠葵は認識していた。

「珠葵ちゃん、冷めすぎ」

年の近い少女の姿で、座ってゆらゆらと身体を左右に動かしながら、桜泉がそんな
ことを言う。

「せっかくの能力。もっと自慢して、お金いっぱいもらえばいいのに」

桜泉にしてみれば、今の状況でさえ、珠葵の能力に比べれば十分に報われていない、
ということらしい。

葛籠の中で、龍河も頷いている。

桜泉よりも龍河の方が重傷だったせいで、龍河の治りは遅い。

頭に浮かぶ心話で会話ができるようになったのさえ最近のことで、それまではず

と桜泉が、拙いながらも通訳をしてくれていたのだ。

龍の持つ変化の機能を取り戻したのも桜泉だけで、龍河はまだ、白いもふもふの龍
の姿に固定されたままだ。

珠葵は、桜泉にどう言われようと、別に今のまま何も困っていないので、うー
ん……？ と、首を傾げるだけだった。

「私は別に、三食寝床付きで、こうやってリュウ君やおせんちゃんと毎晩おしゃべり
できれば充分だよ？ 欲なんかかいたって、ロクなコトないってー」

表向きの本業は、妓女たちのための小道具店。

副業は、人に対して危害を加える人ならざるモノの排除過程で出た穢れを浄化
すること。

浄化された穢れの塊は、小龍たちの餌にも薬にもなる。

本業も副業も、今のところ上手くいっている……と、思うのだ。

「まあまあ、その話は今はいいじゃない。お茶でも飲む？ 葉華姐さんが置いていっ
てくれた、いいお茶の葉があるんだよね」

たかがお茶。されどお茶。

皇都でも名の知られた妓楼・南陽楼。その中でも頂点に立つ妓女・葉華の下に通う
のは、高位の官吏や豪商の関係者が多い。

当然、葉華に贈られる物となれば、お茶の葉一つとっても最高級品だ。

そのほとんどはお店の来客用として確保されているのだろうが、他の妓女や下働きの者たちになつて、多少なりともお裾分けはある。

そんなこんなで、お茶を淹れようと珠葵が立ち上がりかけたところで、ふと思ひ出したように桜泉が声をあげた。

「——あ、そくだ珠葵ちゃん。えっと、定期巡回でコレ剥がしたの、言うの忘れてた。ごめん」

そう言つて、着ていた服の胸元から襖紗を取り出すと、そのまま机の上に置いて珠葵の方へと押し出す。

「えー……」

その襖紗を見た珠葵は、中身を確かめる前に、再度腰を下ろして思いきり眉を蹙めた。

「忘れてた、つて……おせんちゃん、体調は？ 気分悪くない？」

「大丈夫、大丈夫。そのためにコレで包んだんでしょ？ 御史台更衣部謹製の襖紗、効き目はバッチシだよ」

「もう……」

ため息とともに桜泉を見やるも、確かに気分が悪くなつたりしている様子はない。

とりあえず中身を確かめなくてはと、珠葵はその包みをそつと解いた。

「……呪符」

「そう。えつとね、場所は全く同じじゃないけど、ほぼいつも通り。皇宮内の、更衣部の周り。何枚かあったから全部取ってきた」

エライでしょ、褒めて？

そう言わんばかりに胸を張る桜泉に、珠葵も苦笑いだ。

龍河の怪我を早く回復させたい桜泉は、いつの頃からか鄭圭琪が持ち込んでくる穢れ付きの小道具だけでは物足りなくなつていたので。

珠葵の知らないところで、皇宮内に仕掛けられている呪詛の塊を取り除いてくるようになった。

皇宮内は家柄だの地位だの、足の引つ張り合ひは日常茶飯事。まして皇族もいるとなれば、剥がしても剥がしても呪詛の塊は湧いて出てくる。

最初こそ珠葵も呆れていたが、あまりに日常茶飯事であることと、その量に、近頃は桜泉の「真夜中の巡回」に文句を言う気力は失せていた。

それで龍河の回復が一日でも早まれば、それはそれで僥倖というものだ。

「誰か知らないけど、懲りないなあ……ちよつと待つてね、おせんちゃん。すぐ珠にしちゃうから——」

「あ、珠葵ちゃん、待った！ 雪娜に見てもらう用に、その札に書かれているモノ、写し取っちゃわないと！ ただ浄化するだけじゃ、ちょっと不穏だよそれ！」

早速、浄化の術を行使しようとする珠葵に、桜泉がガタガタと机の引き出しを引っ張って、紙と筆記用具を中から取り出した。

悪意が強い物の場合、浄化に加えて背景も調べるべきか、更夜部に知らせることになっているのだ。今回はかなり悪意が強いようだ。

「珠葵ちゃん、画力まったくないワケだし、私、書くね！」

「……………」

まったく、を力説するとはどういう了見だ——と思ったものの、葛籠つづらの中の白い小さな龍も、桜泉の言葉に無言を貫いている。

どうやら彼らに、人間同士ののような気遣いを求めるのは無理なようだった。

「ねえ、おせんちゃん。それ、呪符だよね？ 気軽に写すとか言ってるけど、大丈夫なの？」

呪符。要は、呪いのかかったお札だ。

いくら桜泉が国を守護する龍の子といえど、影響がないなんて言いきれないはず。

不安げな珠葵に、桜泉は笑って右手の筆を振り回した。

「大丈夫、大丈夫！ 万一を考えて、一筆分だけ書かずにおくから。そうしたら呪い

の札としては成立しないでしょ？ 不完全な呪式になるんだから」

「え……………」

そういうものだったのだろうか。いや、でも、そう言われればそうかもしれない。ただ、それって書き写す意味あるんだろうか……………」

「何言ってるの、珠葵ちゃん！ あの雪娜が、一筆分欠けたくらいで、何の呪符かわからないと思う？ そんなワケでハイ、これ書けたから！ とりあえずこつちをしまって、札は浄化！ でもって圭琪に手紙！」

そんな珠葵の表情を読んだのか、一気にまくし立てた桜泉は「ほら、解決！」と言わんばかりだ。

珠葵は一瞬、呆気にとられてしまった。

「お店番ならアタシがいるし！ だから珠葵ちゃんは、とりあえず浄化！」

お店の方は、いつ、誰が訪ねてくるとも知れないのは確かだ。妓楼に客が来る時間帯となれば、店はなかなか慌ただしくなる。

桜泉に追い立てられるように、いったん奥へと引つ込んだ珠葵は、机の上に置いた複数の紙の札に改めて手をかざした。

「……………」

するとその瞬間、札の周りの空気がふわりと舞い上がり、珠葵の手をそのまま包み

込む。

ただ、その空気はあまり触れられて心地の好いものではなかったために、珠葵は我知らず顔を顰めてしまった。

「！」

しばらくすると、文字が札から離れて宙に浮かび上がった。

何が起きているのかと、珠葵は茫然とそれを見つめていたが、あつと言う間に青い炎と化して、全ての文字が消えてしまったのだ。

そして燃え滓の代わりに、コトンと音を立てて、^ル珠が白紙になった紙の札の上に転がり落ちた。

「コレ……おせんちゃんに写しておいてもらって正解だった……かな？」

珠葵がこういった作業をする時に願うのは、殺意や呪いといった、お世辞にも前向きとは言えないどす黒い感情の昇華だ。

軽度の悪意であれば、浄化といっても昇華された悪意がただ^ル珠になるだけで、それ以外の現象が起きることはない。

それが文字ごと燃えて^ル珠になったのだから、そこには段階が上の浄化が必要だったほどの何かが込められていた、ということなんだろう。

おせんちゃんに、呆れられるだろうなあ……と思いつながら、白紙になった紙と、そ

の上にある^ル珠を持って、お店の方へと戻る。

「おせんちゃん、お店番ありがと！」

わざと明るい口調でそう声をかけると、桜泉は上手くいったと察したのか、こちらを向いてから、ぱあつと顔を輝かせた。

「その顔は、ちゃんと^ル珠にできたってコトだね？」

「ま、まあ、一応ね？」

お店側の軒先で、はたして文字が浮いた——などと話をしていいものなのか。迷う珠葵の返事は曖昧だ。

「食べていい？ お兄ちゃんと半分こできそう？」

「そ、そうね？ 札は何枚かあったわけだから、一枚に一個。力はあまり強くないけど、おやつくらいにはなるかも？」

「やたっ」

嬉しそうに手を差し出されれば、珠葵としても^ル珠を乗せてやるしかない。

傍から見れば、飴を口の中に放り込んでるようにしか見えないのだから、お行儀がどうのと言うわけにもいかなかった。

「まあ、まあ、そんな複雑そうな顔しないで？ おやつ分はちゃんと働くから」

自らが書き上げた不完全な呪符を見ながら、桜景がこちらを窺うように首をこてんと傾ける。

「圭琪への手紙はちゃんと届けるし。何ならこのお札をそのまま雪娜に届けようか？」
「いや、さすがにおせんちゃんでも、雪娜さんの所に直接持つていくのは難しいんじゃないかな……？」

そのあざと可愛さにうっかり絆されそうになったものの、ふと浮かんだ疑問が珠葵の首も傾げさせる。

「だって、御史台の更夜部の中でも、皇宮内で皇族のいる所並みに警護されてるんだよ？ 御史台の周りで呪詛入りの札を剥がしてくるのとワケが違うと思うんだけど……？」

皇宮における通常の政務は当然昼間の仕事だ。御史台にも本店と呼ばれる監察中心の部署があり、主軸はそちらだとされている。

ただ御史台の中に設置されている更夜部は、主に夜間に跋扈する魍魎魍魎が相手となる特殊な部署なのだ。

その御史台を束ねる朱雪娜は、持っている力の大きさと希少性からも、昼よりは夜に皇宮内にいることがほとんど。昼間の監察であれば代理を立てられても、妖を駆逐する能力となればそうそう代わりは利かないのだ。

本人の持つ力が規格外すぎて、小物を退治しようとしても、皇宮が吹き飛ぶくらいの威力が発揮されてしまうからだときえ噂されている。

また、日頃から雪娜の力の大半は、皇宮を囲む結界の維持に使われている。昼間の部署である御史台本店を束ねる資格はさておき、更夜部の長就任の条件は、その結界が維持できるかどうか全てだとさえ言われているのだ。

まだ二十代であるはずの雪娜がその長となっているのは、その力を持つことの証左だと言えるだろう。

代々の御史台更夜部の長が皇宮内の結界を維持し、国を守護する龍が国全体に目を光らせ、魍魎魍魎たちの暴走を防ぐ。

長くこの国に受け継がれている守護の仕組みだ。どちらかを崩せば、国が傾いたとて不思議ではないのだ。

実際、雪娜の右腕と自他ともに認めている鄭圭琪でさえ、皇宮の結界は維持できない。「雪娜様の負担を減らして差し上げるのにも限界がある」と、口惜しそうに呟いていることも一再ではない。

「んー……じゃあとりあえず圭琪のところに行ってくるよ。そこまでなら、別に無理やり入り込まなかったって入れるし」

桜景とて、人外のモノには違いない。果たして御史台の奥深くまで入れるものな

のか。

珠葵は不安が隠せなかった。

【珠葵、桜泉】

とりあえず、鄭圭琪に手紙を持っていつて、札をどう扱うか指示を仰ごう——。

珠葵と桜泉がそう結論づけたところで、それまで黙って籠の中に包まっていた龍河がふいに心話をあげた。

【珠葵が浄化する前のその呪符……ものすごい怨念を感じた。一筆足りない模写だとしても、渡す相手は選んだ方がいい。いっそ、今は鄭圭琪にも詳細は知らせずに呼び出しの手紙だけにしておいた方がいいぞ】

「え？」

人の姿がまだとれない龍河は、滅多なことでは心話をあげない。

珠葵と桜泉が会話を止めて見やるには、充分だった。

「お兄ちゃん」

「え、リュウ君、この一筆欠けた呪符が、何を狙っていたかわかるの？」

【……誰に聞いてんだよ。国の守護龍・龍泉の子、龍河サマだぞ？】

驚く珠葵と桜泉に、龍河がゆつくりと頭を上げる。

【ちなみに桜泉、元の札はどこから剥がしてきた？】

「うん？ えーっと……皇宮内の建物の床下から引つpegしてきた。多分だけど、御史台更夜部のある辺りじゃないかな」

桜泉が思い返すように、天井を見上げてそう答えると、龍河は【やっぱりな】と、納得したかのように何度か頷いた。

【ああ納得、納得。よくわかった。あのな、コレ、個人というよりは朱家を狙って弱体化させようとしていた呪符だ。懲りない誰かが、まだ朱雪娜を狙ってるってことだよ】

「えっ？ っていうか、まだって——」

これ以上ないくらいに大きく目を見開いた珠葵に、龍河は小龍の姿のまま【うん？】と、首を傾げた。

その後、話が噛み合わない理由に自分でも気がついてたらしく【ああ、そうか】と、心話をあげた。

【雪娜の母親が生きてた頃からの話だって、龍泉から聞いたけど、珠葵はまだ南陽楼に來ちゃいなかったもんな。まあとにかく、ずっと以前から雪娜というか、朱家を御史台から引きずり下ろしたい勢力があるみたいなんだよ。大抵、今回みたいにいつか破算になるから、最近は割と静かだったけどな】

先代の御史台更夜部の長は、朱司晴——つまりは、雪娜の父親だった。
更夜部は、魍魎魍魎、魔のモノを退けられる力が全て。

司晴の子である雪娜が後を継いだのは、全くの偶然。

司晴が結婚した相手が、司晴ほどではなくとも、多少なりとも妖退治の才を持つ皇家所縁の姫だったために、二人の血を継いだ雪娜の力が強大になったただけなのだ。

それでも、それを認めようとせず親の鼻肩目だと、雪娜を厭う勢力は未だに一定数存在していると聞いている。

そして、皇宮屈指の美女と言われていた、雪娜の母・馮美娜を手中に収めたかった現皇帝が、その血を色濃く継ぐ雪娜に執着をしている、との噂さえあるのだ。

龍河が言っているのは、そういった勢力からの嫌がらせ行為だろうと、そういう話だった。

店の奥で丸くなって眠っていることの多い龍河だが、その気になれば遠くの会話を耳に入れることだって容易い。

「む……それは由々しき事態」

雪娜に対する悪意が原因らしいと聞けば、雪娜に恩義を感じている珠葵としても放つてはおけない。

自分に何ができるかと考え込む珠葵を【まあまあ】と龍河が宥める。

【そのあたりは雪娜が何とでも判断するだろうさ。ともかく手紙で知らせる内容に慎重になること自体は間違っちゃいないって話だ】

それだけ元は物騒な札だということなんだろう。

「もし、おせんちゃん、雪娜様に会ったら『何でも遠慮なく命じてください！』って、伝えておいてくれる？」

珠葵は真剣に言ったつもりだったのだが、桜泉は「珠葵の雪娜至上主義はいつものこと」と、半ば呆れたように「はいはい」と、笑って姿を消してしまった。

もちろんちゃんと届けには行くのだろうが、一抹の不安は残る。

【……鄭圭琪には会えるだろうけどなあ……】

多分、龍河も似た感想を持ったのかもしれない。胡乱な目で桜泉の去っていった方角を見つめていた。

【まあ、今さらだな。それはさておき……珠葵、どうやらすぐに客が来そうだ】

国の守護龍・龍泉の血を引く龍河は、人の姿がとれなくとも音の聞き分けは遙かに優れている。珠葵には聞こえない音を聞いたのか、小道具店にこれから訪れる人間がいることをそつと教えてくれた。

「そっか、ありがとリュウ君」

【なっ、こつ、子ども扱いをするなっ】

珠葵がことのほか気に入っている、龍河のふわふわの白い毛をそつと撫でると、龍河の動揺した声[〃]が返ってきた。

そして、撫でて満足した後は——お客様をお出迎える顔になった。



「珠葵、珠葵！ もう、これ、全部買い取って頂戴っ！」

珠葵の小道具店は皇都有数の妓楼・南陽楼の一画にあるが、そこを訪れる客というのは南陽楼の関係者だけではない。

南陽楼以外に籍を置く妓女、あるいは妓女見習いの子が、衣装やその身を飾る装飾品を借りたり、売りに来たりもするのだ。

この日、いつになく声を荒らげながら大量の手荷物とともに店に姿を現したのも、そんな妓女の一人だった。

「え……これ全部ですか？ さすがに多くないですか、明明姐さん^{メイメイ}」

北陽楼の妓女・明明は、もう少しで売れっ子妓女の仲間入りができそう——と、いった立場にいる妓女だ。

本人がそう吹聴するわけではないにせよ、大店^{おおだな}の若旦那という太客がいて、時折珠

葵の店に来ては、その贈り物を還元してくれたり、南陽楼一の妓女である葉華が寄贈する衣装や小物を借りていたりするのだから、それなりの富裕層が集まる場に呼ばれているということなのだ。

その明明が、来るなり大量の手荷物を店の机に置いて、取り乱している。

「もういいのよっ！ 見たくもないわ！ 思い出もろとも処分してやるわよっ」

「ええ……」

——この流れには、覚えがある。

珠葵は困ったように顔を痙攣^{ひきつ}らせながら、目の前で泣き叫ぶ妓女をしばらく見ていることしかできなかった。

第二章 一顧傾城、再顧傾國

大店の若旦那から「結婚するからもう来ない」と、一方的に言われてしまった——。何とか宥めすかしながら明明の話を聞けば、要はそういうことなのだ。

泣きながら、その若旦那から贈られた物を全部持ち込んだのだ。

「あー……」

もちろん驚きはしたけれど、ここは妓楼だ。

小道具店にいる珠葵でさえ、実のところそんな話を聞くのは一度や二度じゃない。

そのたびに、店番を手伝う桜泉の方が「ホント、男ってロクでもないイキモノなのね」と一緒に熱くなり、妓女のもやもやを昇華させたりもしてきた。

性格的にそんなことは言えない珠葵は「今度、妓楼の外のお店に甘味でも食べに行きましようー」と、一生懸命宥めるくらいしかできないのだが、それはそれで、甘い物の誘惑に釣られて領いてくれる妓女もいて、小道具店が愚痴聞き所のようになってしまうことも一再じゃなかったりする。

桜泉を「おつかい」に出してしまった珠葵が今できることといえば、その「甘味を

食べに行きましようー」で明明を何とか落ち着かせることくらいだ。

この店内で唯一の男性(?)である龍河とはいえば、そんな明明を宥めるでもなく、葛籠の寝床で小さな両手を頭に乗せている。

多分アレは、いたたまれなくて頭を抱えているんだろう。

何せ今の見た目は、客に驚かれないよう角を隠した「白いもふもふの子猫」なので、こういう仕種だろうと、珠葵にしてみればカワイイとしか思えなかったのだが。

「……そうね。売り払ったこのお金もあることだし、甘味処の貸切でもしようかしら。珠葵、呼んだら来てくれるのよね？」

「もちろんです！」

新しい着物を買うとか簪を買うとか、もつと他にも使い方はあるのかもしれないが、お金を受け取るのは珠葵ではなく明明なのだから、使い方は人それぞれだ。要は前を向いてくれればそれでいい。

さんざん、大店の若旦那とやらの愚痴を吐いて少し気が紛れたのか……「ありがとね、珠葵」と最後には言い置いて、明明は店を後にしていった。

珠葵も龍河も、何だか大仕事を片づけたかのような気になったほどである。

「さて！ リュウ君もとりあえずコレ、一覧にするの手伝ってくれる？ 選別して並

べてくれると嬉しい」

明日の夜には、持ち込まれた装飾品は、全て他の妓女たちの身を飾る物へと有効活用されている予定だ。

稀に、フラれたり他の妓女に横取りされた恨みつらみがこびりついて、身に着ただけで不幸を呼んでしまいそうな装飾品も交じっているのです、そのあたりは珠葵も確認を疎かにできない。

【ああ、いいぞ！】

妓女の衣装類は珠葵が一度床に広げて、髪留めや首飾りといった小物は龍河が口にくわえつつ、小さな身体で一つずつ丁寧に床に並べていく。

【……あ】

その龍河が、不意にピタリと動くのを止めた。

【珠葵】

「リュウ君？ どうかした？」

【コレ、気持ちが悪いな】

そう言っ、片足でそっと何かを指し示している。

珠葵もピタリと衣装を持つ手を止めた。

「……短剣？」

見た目には、鞘も柄も、飾り細工の綺麗な短剣だ。

けれど、龍河に【気持ちが悪い】と言われて目を凝らしてみれば、確かに焚き火の残り火のような、黒い煤のような揺らめきが、短剣を取り囲んでいるのが見えるのだ。

【コレ、人間の血と妖の血を両方浴びて、妖刀になる寸前の短剣かもしれない。さつき珠葵が浄化修復したのよりも、強烈な念を感じる】

「――」

龍河の言葉に、珠葵は思わず息を呑んだ。

「それは……さすがに勝手に浄化しない方がいいね……」

さつき桜泉が持つて出た札よりも強力な念が籠もっているとあつては、それは躊躇いも出よう。

「うーん……おせんちゃんに、戻ってからもう一回出てもらうしかないかあ……」

【相手が桜泉でいいなら、言葉を届けるくらいはできるぞ】

うーん……と呻く珠葵に、龍河が【更夜部に報告することを優先した方がいいぞ】と、もつともなことを言う。

【オレが行ければいいんだけど、そうもいかないしな】

葛籠の横で申し訳なさそうにしている龍河に、珠葵は慌てて両手を振った。

「ううん、リュウ君はまだまだ体調万全じゃないんだから、気にしちゃダメだって！

でもそっか、兄妹だからそういうこともできるんだ。リュウ君の身体に負担はかからない？」

朱雪娜は、御史台更夜部にいるはずだ。皇宮全体を取り囲む結界を張り巡らせている関係上、おいそれと皇宮を空けることはできないからだ。

桜泉に手渡したのは報告書のようなものだから、こちらから手紙を出す形で良かったけど、今回は目の前のこの短剣を、引き取って確認してもらわないといけない。

そうなると、雪娜の部下である鄭圭琪に連絡を取って、短剣を引き取りに来てもらうよりはかはないのだ。

更夜部に、他に人がいないわけではないけれど、珠葵の伝手が、二人以外には及んでいない。だから、たとえさつき手紙を届けたばかりでも、また圭琪に連絡を取らざるをえない。

雪娜でも圭琪でもない、別の官吏が取りに来たとしても、それは一向に構わないけれど、それを判断するのは珠葵じゃない。

【多少疲れるかもしれないが、後でいつものように「珠」を分けてくれれば大丈夫だ】

どこまで本当かはわからないが、龍河はそう言っただけで尻尾をたしと床に叩きつけている。

「本当に？ 最終的にはこの短剣だって浄化するだろうから、その後の「珠」はもちろんリュウ君にあげるけど……あ、ちょうど梅酒が良い具合に漬かってきたから、それもちよつとあげてもいいよ？」

妓楼・南陽楼には敷地内に見事な梅の木がある。

以前妓楼にいた妓女の一人から教わって、梅酒を仕込むようになったのだ。

珠葵自身は当然まだ飲める年齢ではないが、毎年、売れっ子妓女葉華を筆頭にお酒好きの妓女たちに味を見てもらって、作り上げる。

今では妓楼を訪れる客にも普通に振る舞われている、いわばちょつとした南陽楼名物なのだ。

そして、以前たまたまこぼれた梅酒を口にして以降、龍河もまた、この梅酒のトリコだ。

はたして国を守護する龍の子が、お酒を飲んでもいいものなのか。

【ああ、飲む！ 大丈夫だ、ついでに雪娜でも通して龍泉にも一杯献上しておけば問題ない！ むしろそうしておかないと、龍泉が拗ねる】

最初に梅酒を口にした龍河からそう言われて以降、龍河や桜泉が梅酒を口にする時には、親龍である龍泉にもお酒を届けることを、珠葵は実行している。

桜泉は甘味の方が好きなようだから、深夜のおつかいのおやつは、一緒に明明の甘

味処貸切に連れていくことでも良さそうだけど。

「わかった、そうする。じゃありユウ君、おせんちゃんに伝言頼める？」

【任せろ！】

そう言った龍河は、くるりと身を翻すと、葛籠の中に丸まって——静かに目を閉じた。



国を守護する龍、龍河と桜泉の父龍である龍泉が、いつ、どこで、誰と梅酒を飲むのか気にはなる。が、本龍に聞く以外にはわからないだろうことも確かなので、そこは珠葵も深くは追及できない。

「私も成人したら、おせんちゃんやリユウ君と飲んでみたいなあ……梅酒」

せいぜい、そんなささやかな願望を口にするくらいだ。

何せ珠葵は、まだ誰かと盃を交わせるような年齢ではない。

【別にいつでもいいだろうに】

人としての法律の範囲の外にある龍河は、あつけらかんとそんなことを言うけれど。

「そりゃ、飲めるか飲めないかって聞かれれば、飲めないわけじゃないけど。余計なことして雪娜様に迷惑かけちゃ本末転倒だもの」

ただでさえ、皇宮内には雪娜の足を引っ張りたい連中が跳梁跋扈しているらしいというのに。わざわざこちらからその種を提供してどうするという話だ。

【ああ、はいはい。珠葵の雪娜至上主義は今に始まったことじゃないよな】

「そんな言い方しないの。私もそうだけど、リユウ君やおせんちゃんだつて、雪娜様がいなかったら、今こうしていられなかったかもしれないだからね？」

雪娜が今の居場所を与えてくれた。

だからこそ、その雪娜のためにならないことは、できる限りこの手で取り除いていきたい。

——今はまだ、何もかもが未熟だけれど。

「さ、とりあえず仕分けの続きしよっか？ もう、気持ち悪いモノはない？」

珠葵はそこで話を切り上げると、再度広げて置いた衣類を手にとって、仕分けの続きに取りかかる。

【そうだな……ああ、とりあえず短剣の話は桜泉に伝言した。要は鄭圭琪に伝わりさえすればいいってことなんだろう？ って、桜泉が言ってる】

「うーん……まあ、それもそうよね。迂闊におせんちゃんが雪娜様に接触しようとするれば、更夜部の誰かに悪意ある妖と勘違いされて、追い回されそうだもんね」

そうして龍河とともに持ち込み品を最後まで仕分けした結果、短剣以外はお店に出

しても大丈夫そうだと、珠葵は判断した。

「……とりあえず、鄭様が来るまでこの短剣は包んでおこっか」

【必要以上に触らない方がいいのは確かだし、上から布でもかけておいたらどうだ？】
見るからにどす黒い煙のような何かに覆われたままの短剣は、確かに進んで触れた
いモノじゃない。

珠葵は大人しく、龍河の忠告を聞いておくことにした。

「たっだいまー」

しばらく経って、真夜中の小道具店にそぐわない、軽ーい声が店の中に響いた。

「おつかい完了——」

声とともに姿を見せたのは、桜泉だ。

「雪娜と直接は会えなかったけど、鄭圭琪を通してすぐに話はしてもらったよー？」

「えっ、そうなんだ？」

すぐには無理だろうと思っていただけに、それは僥倖だ。

「雪娜からの伝言で『後のことはこちらで引き受ける。いつもすまない』ってー」

「雪娜様……」

「でもって、鄭圭琪からは『すぐ行くから、そのまま起きて待っていてくれ』……」

だって」

基本的に、人外のモノである彼らには、敬語の概念がない。

雪娜様を呼び捨てに！　なんて、言っても無駄な話だった。圭琪のこともしかりだ。
わかった、ありがと——と、珠葵も答えるしかない。

「……うわ、その布の中身がそうよね？　確かに禍々しい！」

御史台に行っていて、短剣の存在を直接目にしていなかった桜泉が、戻ってきてす
ぐに、短剣が持つ不穏な気配に反応している。

「うん。リュウ君がね、人の血も妖の血も、両方浴びてるんじゃないかって」

「確かにそうかも……中途半端に力のあるヤツとか、素人は触らない方がいい類の
ヤツだよ。確実に引きずられる。うーん……予想だと、もともとは人間に擬態して
いた妖が使っていたのを、何らかの拍子に人間が手に取って、禍々しい魔力にあて
られて他人を傷つけた……ってカンジ？」

口調とは裏腹に、容赦のない指摘だ。何だかんだと言っても、桜泉とて人外の龍。

珠葵は顔を顰めることしかできない。

ここまで禍々しくなければ、本当なら今すぐ浄化をしてしまいたい。だけどそれを
聞いてしまうと、間違いない御史台更夜部が扱うべき案件だとわかる。

最終的には浄化を依頼されるとしても、御史台の許可は必須だった。

「まあ、手で触らずに、ああやつて清浄な布で包んでおけば、御史台の連中が来るくらい時間は、おかしな事態にもならないだろうさ」

葛籠に包まる龍河も、そんな心話を上げる。

「……わかった、そうする」

「ああ。じゃ、そういうコトで梅酒ヨロシク」

「えっ、梅酒」

閉じていた目を薄く開けて、意味ありげに珠葵を見上げる龍河に、桜泉もすぐさま反応した。

「おせんちゃん、普段飲まないでしょう？」

国を守護する龍の子が、実は酒好きでした——なんて、どこにも暴露できないじゃないか。

そんな珠葵の思いを読み取ったのかどうか、桜泉の方は「うーん」と、天井を見上げた。

「確かに甘い物の方が好きだけど……飲まないとは言ってないよ？　ただ、あまり飲んだら、葉華の雷が落ちてきそう」

「ぐ……」

この南陽楼どころか、全妓女の中でも頂点にいるんじゃないかと言われている妓

女・葉華は、たとえ相手が守護龍の子だろうと、まるで動じないのだ。海千山千の美女である。

朱雪娜と同じか、あるいはそれ以上の女傑だと葉華を認識しているらしい龍河も、一瞬間を逡巡らせて呻いているほどだ。

「じゃあ珠葵、今年の梅酒はもうできたの？」

「大丈夫なんじゃないかな……」

梅酒は冷暗所での保管が必須なので、普段は床下に専用の場所を作って、そこに寝かせてある。

桜泉に問われた珠葵はそう答えながら隣の部屋に向かう。

足元の一箇所を少し持ち上げて、外れた中から自家製梅酒の瓶を取り出してみた。「せっかく、おせんちゃんは明明さん主催の甘味処貸切の会に連れて行ってあげようと思ったのに……」

チャリと桜泉を見ながら呟いてみると、案の定、髪を逆立てるかのようになり、桜泉は反応していた。

「えっ、何それ」

「たまに来る北陽楼の妓女さん、覚えてるでしょう？　彼女が言ってたのよ。いろいろと売ったお金で、甘味処貸切の会を開く——って」

「えーっ、じゃあ、そっちでいい！ 梅酒は飲まずにいる！」
 「そう？ じゃありユウ君にだけ、ちよつとあげてくれる？ それで飲み終わったら戻す！……で、了解？」

【了解】

一見、殊勝に声を揃える龍河と桜泉。

一見、と言ったのは、教えた覚えもないのに桜泉が棚の扉を開いて、杯を早々に取り出しているからだ。

もう、殊葵はクドクドと注意する気も失せてしまった。

「ところで、おつまみとかないけど良いの？」

半ばヤケのように聞いてみると、桜泉が「いい、いい」と、片手を振った。

「漬かっている梅を一二個つまみ食いすれば充分。あ、梅だけなら龍河と一緒に食べてもいいよね？」

【いいよな？】

「……まあ、いいかな」

こうなれば、後は放っておいて、お店で御史台更夜部から人が来るのを待つのが賢明だろう。

殊葵はため息を吐きながら、そう思った。



「殊葵」

人が来る、と言っても殊葵の場合、呼び出す相手はそもそも片手の数で事足りる。

この店や買い物途中の街中で、会って会釈するくらいの顔見知りなら何人かいるにしても、手紙を送って、なおかつ来てもらうとなると、勝手が違う。

「すみません、鄭様。さっきも来られたところだったのに」

店に入ってきた人影に気づいて殊葵が声をかけると、鄭圭瑛は慣れているのか、特に驚いたふうでもなく、苦笑を浮かべた。

「いや。更夜部に桜泉が現れたくらいだ。何かしらあったんだろうと理解はしている。早速、その短剣とやらを見せてもらっても？」

桜泉もそうだが、龍河も守護龍の子だ。

圭瑛にも、最初こそ様^{よう}を付けた方がいいのかという葛藤^{かつとう}があったようだが、上役たる雪娜の「そんなことをすれば、ただの少女や小動物だと誰も思わなくなる」との一言から、親龍である龍泉の許可も得たうえで、圭瑛や雪娜にも呼び捨てが許されるようになった。

「ああ、はい。でも、迂闊に触っていいかどうかとも躊躇^{ため}われる状態なので、受付の裏

側に回ってきて、見てもらえませんか？」

珠葵の言葉に、圭琪も少し驚いたようだった。

「……そんなに」

「……はい」

険しい表情でコクリと頷く珠葵に、さすがにただごとではないと察し、圭琪も僅かに目を細めて、珠葵が頼んだ通りに受付の中の方へと入ってきた。

「——なるほど」

そして数歩足を踏み入れたところで、珠葵の言いたかったことがわかったのだろう。一度、足を止めた。

「確かに、半端のない威力だな。これほどの邪気を見るのは、ここしばらく記憶になかったかもしれない」

「はい。リュウ君も『中途半端に力のある人間も、素人も、どちらにしても迂闊に触らない方がいい』って」

この店に何度も来ているうえに、雪娜の傍に仕えている以上、圭琪も龍河のことは当然把握している。実力ある小龍の言葉に、納得したように頷いていた。

「まあ珠葵なら大丈夫な気もあるが、龍河の言っていること自体は正しいな。雪娜様も気にしていたから、一度更衣部に持っては帰るが……その後の浄化は可能か？」

「あつ、はい、大丈夫です！ ただ、ごっそり力を持っていかれそうなので、その日は多分、他の道具に術はかけられないことになると思いますけど……」

「わかった。では浄化を頼む際には、そのあたりを考慮して持ってくることにしよう」

そう言った圭琪は、布で包まれた短剣を手にとった。

どうやら、浄化の術をかけた布で包んだことで、何とか影響なく手にできているらしい。

「また連絡する」

そう言って圭琪は、すぐさま店を後にしていった。

そしてその後、妓楼が閉じる——つまりは、翌朝になっても圭琪は戻ってこなかったのである。

「とりあえず、今日は閉店かな……」

営業時間が昼夜逆転しているのが、妓楼だ。

朝になったから、閉める。それが珠葵の日常だ。

龍河と桜泉は近頃、店に置かれている、妓女と客との娯楽の一つである 陞官図しょうかんずという遊戯を、よく一緒に楽しんでいる。

紙でできた専用の盤と、専用の独楽こまを回して、出た目にしたがってマス目を移動し、高い官職に就くのを目的とする遊戯だ。

単純と言えば単純な設定のため、決まりごとを覚えてしまえば龍河や桜泉でも遊べるのだ。

この夜も、明け方になって店が落ち着いてきたあたりで、龍河と桜泉が陞官図に熱中し始めて、それを横目で珠葵が見守るといふ、あくまで店としては平常運転、平和な縮図がそこでは展開されていた。

【まあ、こっちは霊獣どころか神獣だからな。そもそも襲撃をかけよう、なんて阿呆な妖はいない】

どうやら人外の序列としては、そもそも妖あやかしとは一線を画した理ことわりの中で生きる、神獣しんぶつが頂点であるらしい。

その下に、元は妖ながら邪気を浄化されて生き残った獣である、霊獣れいぶつがいて、妖あやかしはさらに下、妖たちの中も人間に害を為す存在、為さない存在と、まさに玉石混交状態。

この店の中では言え、龍河・桜泉兄妹は神獣、つまりは妖たちは基本的に歯が立たないのだ。

龍河が、襲撃と口にしたことで急にソワソワとした珠葵に、龍河は「更夜部

が何も言っていなければ、こちらとしても気を張っていても仕方がないだろう」と、最後には言いきった。

「リュウ君、今、酔ってないって言いされる？」

ほどほどに、と釘を刺してはおいたものの、それなりに梅酒を舐めていたのを珠葵は見ている。

【……桜泉がいる】

今、ちょっと間が空いたのは気のせいだと思いたい。

見た目は小さな白い龍だけど、多分この中では龍河が誰よりもしつかりしていると、珠葵は思っている。

「結局のところ、あの短剣をどうするかが決まらないことには、一緒に持ち込まれた装身具たぐいの類はまだ貸し出せないんだよね……」

圭琪に渡した短剣には、明らかに呪いのような邪気のような、清浄とは程遠い気配がまとわりついてた。パツと見る限り、その影響は一緒に持ち込まれた物にまで影響は与えていないようだけど、万一ということもある。

短剣が手元に戻ってきたところで、できればひとまとめに浄化の術をかけておきたかった。

【その方が無難だろうな】